地域ぐるみで生産
技術を受け継ぐトマト

山形県の最上地域にある大蔵村の、北東部に位置する「通り・赤松・烏川（からすがわ）地区」。

本地域の主力品目でもある「トマト」は、村の農業生産額の約 1/4 を占める。

▲ 団地化されたトマトハウス（赤松地区）

今後も農業を続けていくために

この地域の農地は水はけが悪く、天候によって作物の収量が左右される他、栽培できる作物が限られてしまうという悩みがあった。また、分散された農地を持つ農家も多く、農地間の移動に多くの時間を費やしていたことに加え、高齢化や担い手不足などの問題もあった。積み重なった問題を解決するためにワークショップが開かれ、住民が一丸となって話し合った結果、「基盤整備が必要」との答えにいきついた。

基盤整備を経て

基盤整備を行ったことで、稲作にも畑作にも対応できる環境が整い、分散されていた農地は、農家ごと、作物ごとにまとめられ、効率の良い農業が行えるようになった。また、整備をきっかけに3つの法人が誕生し、農地を預けたい高齢農家が、安心して農地を貸すことができるようになった。これによって、農地の集積と集約が進み、個人では解決することが難しかった担い手不足解消や、耕作放棄地の抑止につながった。

以前からトマトの生産が盛んであった本地区では、上の写真のようなトマトハウスの団地化も進められた。赤松地区の「農事組合法人グリーンライスファーム」は、基盤整備をきっかけに米とそばに加えトマト栽培を始めて今年で8年目を迎える。今回は、本法人理事の加藤さんと、大蔵村役場産業振興課の早坂さんに、トマトへの思いについてお話を伺った。

01 グリーンライスファーム　理事
加藤　聡さん

株間を狭めたり、接ぎ木の時期を早めたりなど、毎年トマトの作り方を変え、試行錯誤を繰り返しながら収量が最も多くなる栽培方法を探っている。さらに、有機肥料を多く使った栽培も数年前から始めた。モグラなどの被害は増えたが、生育後半でも実付きがいいので頑張っていきたい。

今後の目標は、10a で 10 トン生産すること。それから、販売先を広げていくこと。

02 大蔵村役場産業振興課
早坂　直彦さん

高齢化が進み、後継者不足が問題になっている。今後は、若者に農業の魅力を伝え、関心を持ってもらう必要がある。大蔵村では、若手のトマト生産者が小学校に出向いて話をしたり、栽培体験を行ったりしている。こうした取組みが、トマトに関心を持ってくれるきっかけになればと思う。

地域の皆さんの熱い思いがあるので、しっかりサポートしていきたい。

大蔵トマトの魅力

もともとは露地栽培で加工用のトマトを栽培していたが、平成初期に、設備の導入に対して大蔵村と農協の補助を活用し、ハウス栽培による生食用トマトの生産が拡大された。技術の高い農家が新規就農者への指導を行うなど、地域内で栽培のノウハウを共有することで、地域ぐるみで栽培する環境を整えることができた。これにより、トマトの生産量が増えたのはもちろんのこと、安定的に高品質のトマト栽培ができ、定時定量出荷することが出来るようになった。市場からの評価もあり、大蔵トマトとしてのブランドを築き上げてきた。

トマトハウスのビニールがけを農家同士で行ったり、情報交換をしたりと、トマトにかける思いは熱い。それもまた、おいしさの所以である。

▲ 生食用トマト

▲ 大蔵ケチャップ

販売先 / 肘折いでゆ館 /三和食品大蔵工場